

Title	平成29年度 観劇実習レポート
Author(s)	小國, 真奈; 中川, 登美子; 廣嶋, 萌衣 他
Citation	演劇学論叢. 2019, 18, p. 102-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97403
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

■平成29年度

観劇実習レポート

この実習は毎年演劇学研究室が行っているもので、異なるジャンルの作品を四〜五本観劇する授業である。学部生から院生までが参加し、受講者は事前の予習、観劇後にレポート提出を行う。(観劇した演目は「研究室の窓」に掲載)掲載した五本の観劇評は、平成29年度観劇実習における学生レポートから選ばれた。

観劇レポートがいわゆる一般的な劇評と異なるのは、受講生が必ずしもそのジャンルに精通しているわけではないことだ。しかしこの授業において必要なのは、むしろ新しいジャンルに接触した時に感じる新鮮な驚きや違和感を丹念に言語化する作業である。各ジャンルはともしれば峭壺化しがちだが、受講生のレポートはそのような問題に取り組むうえで示唆に富む意見を投げかけている。学生たちの率直な意見から研究室の日頃の取り組みが伝われば幸いである。

『楢山節考』(平成29年10月22日・大槻能楽堂)

小國 真奈

【著者からインターネット公開の許諾が得られていないため非公開】

トリシヤ・ブラウン・ダンスカンパニー『Anthology:
Trisha Brown』(平成29年11月1日・京都府立文化芸術会館
ホール)

中川 登美子

トリシヤ・ブラウン・ダンスカンパニーによる『Anthology: Trisha
Brown』公演が京都府立文化芸術会館にて行われた。昨年度の

KYOTO EXPERIMENT の「Trisha Brown: In Plain Steel」に引き続き続いたの公演となった。昨年度は京都国立近代美術館が会場とされ、その美術館のあらゆる空間を使い、かつ移動しながらダンスが披露される興味深い試みの公演であった。対する今回の会場は、舞台空間と客席の間には明確な境界線の引かれた、トリシャが活動初期に離れようとした伝統的な劇場形式にあたる。その舞台空間をどのように使用するのか、その中でどのようなダンスを展開するのか、大きな関心を持って観劇に臨んだ。演目は三つで構成され、転換や休憩をはさみながら次の順で上演された。

最初の演目「Opal Loop / Cloud Installation #72503」は中谷芙二子による「霧の彫刻」とのコラボレーション作品である。開幕すると舞台上には既に霧がたちこめ、四人のダンサーがいた。霧は常に舞台後方辺りから発生し続けており、霧自体が吹き出される勢いやダンサーの動き、さらに観客席までを含む劇場全体の空気の流れの影響を受け、人工的に発生されているとはいえ、自然界の霧と同様にうごめいていた。ダンサーの動きはとりとめない動きの連続のようであったが、各人各様のバラバラな動きかと思えば、同時に同じ動きをしたり、時間差で後を追うような動きや、複数人で関連し影響を与え合うような動きになったり、また以前とは異なるバラバラな動きになったりと常に変化に富んでいた。その様子はトリシャによる計画的な振り付けの結果でありながら、霧だけでなく、雲や川の流れなどにも共通する地球上での無作為の自然の動きのように感じられた。ダンサーたちは舞台上の床という空間内の一部分にしか存在しえないのだが、彼らの前後左右だけでなく天井までの間の空間を満たす霧の動きの一部と化し、たった四人で文字通り舞台空間全体を支配するかのよ

うな拡がりを感じられた。

二つ目の「Groove and Countermove」のダンサーは、それぞれ異なる原色の衣装に身を包んでいた。二三人が一组になったようなダンスで始まり、登退場を繰り返しながら様々なダンスが繰り返られる。その人数は次第に多くなり、ついに舞台上には全てのダンサーが揃う。この作品で注目すべきは登退場の多さとそのなされ方だったように思う。ダンサーたちは常にダンスをしながら登退場を行う。少なくとも筆者の席角度から見た限り、どの登退場でもダンサーたちは舞袖でダンスをやめる瞬間を決して見せなかった。あたかも舞袖の奥にもダンスのための空間が広がっているかのように感じさせるほどである。客席から見える「舞台上」という空間だけが彼らの表現空間ではない、舞台の中央であっても舞袖であっても、あるいは袖のさらに奥でも彼らが踊り続ける限りその空間が広がっていく。トリシャが活動初期にニューヨークの屋外でのパフォーマンスで演出しようとした彼女の思考の一端を垣間見たように感じた。

最後の演目「L'Amour au théâtre」は、ジャン・フィリップ・ラモールの音楽「イポリートとアリシ」にインスピレーションを受けた作品である。男女二、三人が一组になり、ラモールの音楽とともにダンスが繰り返られる。この演目では、男性も女性も度々異性を持ち上げる動きが行われる。複数組のダンサーが類似する動きや、直接的に触れ合っ

て影響を及ぼし合う動きの中で、幾度となくまた様々な方法でダンサーが持ち上げられては、下ろされて再び床の上で支えとなったダンサーとの連続する動きに戻る。パレエでは、必ず持ち上げるのが男性で、持ち上げられるのが女性のダンサーであり、その関係性には一種のヒエラルキーがあると考えられる。その他のダンサーが床に接して

いる中で一人空中に掲げられるのは視覚的に注目を集めやすいことが一つの理由である。しかし、トリシャのダンスでは「持ち上げる」という行為にそもそも重要な意味付けがなされていないように感じられた。そもそもストーリーや主人公などといった意味づけが重要視されるバレエとは異なり、床を離れて持ち上げられるダンサーはそうした意味から解放されている。男性も女性も持ち上げられる点に着目すれば、ジェンダーさえも削ぎ落とされているといえるのではないだろうか。舞台上で限りなく平等な「パフォーマー」たちの間では、空中に持ち上げられたところで特別な権威は与えられない。この点において視点を変えれば、トリシャは床から離れた空間がもつ優位性をも剥奪していると言える。トリシャはダンサーだけでなく、舞台上の空間にも平等性を見出し、表出していた。彼女が今年亡くなってしまい、今後新たな挑戦を目にするできないのは残念であるが、今回の上演は彼女がダンスの世界に起こした革新性を見せつけるには十分であったように思う。

仙台シアターラボ『特別な芸術』（平成29年12月2日・ピッコロシアター）

廣嶋 萌衣

【著者からインターネット公開の承諾が得られていないため非公開】

「赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス」(平成29
年12月16日・兵庫県立芸術文化センター)

豊田 航平

【著者からインターネット公開の許諾が得られていないため非公開】

平成30年初春文楽公演 『花競四季寿』／『平家女護島』／
『撰州合邦辻』（平成30年1月20日・国立文楽劇場）

金 潤貞

文楽は、節制され、象徴的な能とは異なる表現方法で物語を与える。その方法とは、直接的であり、比較的にストーリーの展開や使われる言葉がわかりやすい。庶民芸術の一つである文楽のそうした側面から、今回の物語を通して残酷性について考えてみる。

物語の残酷性は、物理的な残酷性、つまり身体への直接的な奇酷行為を含め、精神的に責める行為などで表れる。残酷性は劇的表現の一つとして、強烈な感情及び感覚的反応を起こさせ、観客はそれによるカタルシスを感じることができる。そうした残酷性は『平家女護島』と『撰州合邦辻』で「犠牲」という概念の両面性を通して表れた。犠

牲とは、他人及びある目的のため自分の名誉、利益、命などを捨てることや捧げることを意味する。しかし、それを自分の意志とは関係なく奪われる時も「犠牲にする」と言う。すなわち、犠牲は善の顔をしているが、不当で理不尽なことも犠牲という名の下で起る。

犠牲の裏表の矛盾から出てくる残酷性は『平家女護島』と『撰州合邦辻』で見つけられる。まず、身体的な残酷性は、刀を使って相手の身体を傷つけることや突き刺すこと、首切り、また殺す場面によって表れる。特に、『平家女護島』で俊寛が瀬尾の首を切る場面は、人形であっても、目を背けたくなるほど残酷な場面であった。

だが、実際の残酷性は俊寛の結末にある。表面的には、俊寛が千鳥のため争うのは正義の行為だとも見えるが、実は、その行動の後ろには妻を失った彼の悲しみが流れている。つまり、彼の行動は個人的な悲しみと絶望からのものだと言えよう。結局、彼は一人で島に残されてしまう。絶壁を重い足取りで登り、去ってゆく船を眺めている彼の姿は痛ましく感じさせ、残された彼の人生の侘しさまで見えてくるようである。この結末で、俊寛は不当な仕打ちから人を助けた英雄ではなく、悲しみに浸った一人の人間に過ぎないというのが強調される。

一方、『撰州合邦辻』の玉手御前は自分の父の合邦の手で殺されるという酷い結末を迎える。玉手御前の死の直前、彼女が今までしてきた全てが俊徳丸を殺害しようとする兄から救うための計画であったということが明らかになる。俊徳丸は玉手御前の生血を飲み、病が癒え、彼女は息を引き取る。俊徳丸を救い出す彼女の目的は達成されるが、死に至る彼女の犠牲はどのように理解すれば良いだろうか。重要なのは、このような物語が文楽のメカニズムによって、どのようなメッセージを与えているのかということである。俊寛や玉手御前

の犠牲の行動の底辺にあるのは、政治的葛藤・家族の葛藤⇨社会的葛藤である。そのような性質の葛藤は、個人がコントロールできない、生を操るほどの巨大な力である。その中での個人の犠牲は不可避なものとなる。その意味で、『平家女護島』と『摂州合邦辻』は、見えぬい力に対抗し、あるいは順応しながら、犠牲になる人物の物語ではないかと思う。その人物というのは、世界に踊らされる個人であり、そうした姿は昔も今も変わっていない我々の姿でもある。今回の文楽の物語は人形を操るといふメカニズムと物語とのつながりにより、社会での個人の犠牲というものの両面性を認識させた。